

20世紀の『黙示録』，その宗教的言説の引用をめぐって —カール・クラウスの『黙示録』（1908, 1920）を手がかりに—

堺 雅 志

Vor der Sprache weisen sich beide Reiche —
Ursprung so wie Zerstörung — im Zitat aus.
Und umgekehrt: nur wo sie sich durchdringen
— im Zitat — ist sie vollendet.

言語の前で二つの領域 —根源と破壊— は、
引用においてみずからの正当性を証明する。
そして翻っていえば、この二つの
領域の浸透しあっているところで
—つまり引用において—のみ、
言語は完成しているのである。¹

Walter Benjamin

『黙示録』と『人類の薄明』 —はじめににかえて—

初期表現主義者のヤーコブ・ファン・ホデイス（1887-1942）は詩『世界の終末』（1918）を著し、抽象詩の新機軸を見出した。この詩は、のちに表現主義の教科書ともなる同時代の詩を編んだクルト・ピントゥスの編詩集『人類の薄明』*Menschheitsdämmerung*（1919）の巻頭を飾っている。終末的傾向の強い表現主義者たちのなかでも、このホデイスは、単なるグロテスクや、エクセントリックな表現形にのみ陥るのではなく、終末の形象を物静かに表出する術を見いだした数少ない詩人の一人である。

WELTENDE

Dem Bürger fliegt vom spitzen Kopf den Hut,
In allen Lüften hallt es wie Geschrei.
Dachdecker stürzen ab und gehn entzwei,

Und an den Küsten — liest man — steigt die Flut.

Der Strum ist da, die wilden Meere hupfen
An Land, um dicke Dämme zu zerdrücken.
Die meisten Menschen haben einen Schnupfen.
Die Eisenbahnen fallen von den Brücken.

世界の終末
市民のとんがり頭から、山高帽が飛び、
どこもかしこも叫び声が鳴り響いているようだ。
屋根葺き職人は転げ落ちてまっぶたつ。
海岸には—新聞によれば—高潮が押し寄せている。

嵐がきたのだ、猛り狂う海は
陸にとび上がり、ぶあつい堤防を押しつぶす。
たいていの人間は鼻風邪をひいている。
列車は鉄橋から転落する。²

この短い詩は、戦争を隠喩化し、その脅威をデカダンス的没落のイメージと重ね合わせ、その陰惨をありありと描写している。詩の第一聯最終行にある思考線に導かれた「新聞によれば」liest man という部分は、終末が近づいてもなお、新聞にセンセーショナルな出来事を詮索し、傍観者の態度をとっている人々の様子を端的に表している。これに共通する読者の傍観者の態度を批判する表現を見出し、かつはまた、その読者の態度を作り出すジャーナリズムを批判した批評家がいた。1899年から個人誌『炬火』*Die Fackel* を世に問い、その生涯に亘って言語の営みに巣くうジャーナリズムという害悪を告発しつづけた批評家カール・クラウスがその人である。そしてホデイスはまた、『炬火』の数少ない寄稿者のひとりであった。³

¹ Walter Benjamin: *Karl Kraus*. In: *Walter Benjamin Gesammelte Schriften*. Frankfurt a.M. 1980, Bd.II-1, S.363. 翻訳は、W. ベンヤミン『ベンヤミン・コレクション』全三巻、浅井健二郎訳、筑摩書房、1995-97年に拠った。

² Kurt Pinthus(Hg.): *Menschheitsdämmerung*. Hamburg 1993, S.39. 翻訳は拙訳であるが、本稿執筆中に刊行されたクルト・ピントゥス『人類の薄明 表現主義のドキュメント』、松尾早苗訳、未来社、2016年を参照した。本書は、全訳が待望されていた同書の完訳であるばかりでなく、詩人や詩への詳細な解説と注釈が施された浩瀚な研究書でもある。同書では、Bürger を当時の世相と関連付けて、そして vom spitzen Kopf の Spitzkopf（「狡賢さ」グリム『ドイツ語辞典』）との連想から、1行目は「市民の狡賢い頭から」と訳されている。

稀代の批評家カール・クラウスは、『炬火』第261-262号(1908)で、黙示録のテキストを引用し、読者への「公開書簡」という体裁で、技術文明及びジャーナリズム批判を展開した批評『黙示録』*Die Apokalypse*を発表している。さらに戦後、同様に黙示録を引用し、戦時の状況を詩『黙示録』(1920)に描き出している。第一次世界大戦の終末的時代感情を表現するにあたり、クラウスはまた、『人類最期の日々』(執筆1915-1917、公刊1918年、決定版1921年)において、当時の様々な言説をそのまま引用し、そのモンタージュを作り上げた。

本稿は、新約聖書の『ヨハネの黙示録』から直接引用が多用されるクラウスの二つの『黙示録』を中心に据え、そこに見られるクラウスの終末論的思考の特色を、すなわち終末論的思考がジャーナリズム批判と呼応し、同時代的かつ普遍的言語批判へと通じるさまを明らかにする。手続きとしてまず、同時代の潮流をなした表現主義期の作家の作品をはじめとして、終末論的時代感情を表現するのに『黙示録』がいかに多用されてきたかを、K. フォンドウングの論考を祖述することによって示す。そしてこの同時代の終末論的思考と、クラウスの批評のなかの『黙示録』の引用とが、どのように一線を画するかを、ヴァルター・ベンヤミンによるクラウス論における重要な概念であると同時にベンヤミンの思想の骨格をなした概念である「引用」に関する言説を援用しながら提示する。つまり本稿は、クラウスが『黙示録』のテキストを、どのように言語批判に収斂させてゆくかを眺めながら、クラウスの詩を含む批評の技法に光を当てる試みである。

カール・クラウスと表現主義

1911年に書かれたゲオルク・ハイムの『戦争』と題された詩には、当時の没落のヴィジョンが克明に描かれている。

DER KRIEG

Aufgestanden ist er, welcher lange schlief,
Aufgestanden unten aus Gewörben tief.
In der Dämmerung steht er, groß und unbekannt,
Und den Mond zerdrückt er in der schwarzen Hand.
[.....]
Über sturmzerfetzter Wolken Widerschein,

In des toten Dunkels kalten Wüstenein,
Daß er mit dem Brande weit die Nacht verdorr,
Pech und Feuer träufet unten auf Gomorrh.

戦争

立ちあがった 長い間眠っていたものが
立ちあがったのだ、地下蔵の奥より
夕闇のなかへ 得てもしれない巨大な姿が立ち現われ
黒い手をのばして月を握りつぶす
[.....]
嵐に引きちぎられた雲の反照を足元に
詩の暗黒の寒冷の虚空に炬火をふりかざし
彼はかくして夜を焼きつくし
瀝青と火をゴモラの街にしたたらす⁴

この詩も『人類の薄明』の巻頭の章「崩壊と叫び」に編まれた詩のひとつである。これは戦争を擬人化し、その脅威をデカダンス的没落のイメージと重ね合わせ、その陰惨をありありと描写している。『黙示録』が文学的文脈で果たした役割を詳らかにした浩瀚な研究『ドイツにおける黙示録』*Die Apokalypse in Deutschland*で知られるK. フォンドウングは、1914年までの第一次世界戦争を控えた期間に表現主義者によって書かれた予感的な詩群は、終末的様相を帯びていると指摘している。⁵ヨハネの『黙示録』は中世末期に正典化され、新約聖書の掉尾におかれてなお、内容の是非をめぐって神学的論争の標的とされていたが、そこに描かれる終末論的思想は、世俗化するのに時間を要さず、戦争や革命などを時代背景に文学、絵画の格好の素材となる。『黙示録』のテキストは、災いと滅亡のグロテスクな描写とそれに続く「千年王国」、「新しいエルサレム」のヴィジョンへの預言的性格から、困難な時代を生きる世俗の掬りどころとなる。破壊だけでなく、それに続く再生のヴィジョンあることが、『黙示録』有する本来の構造であり、それが『黙示録』の受容を可能ならしめていた。けれども、フォンドウングに拠れば、近現代の『黙示録』受容は、グロテスクとエクセントリックに終始する「端折られた」黙示録であるという。⁶そこには、未来のヴィジョンが欠落している。だからこそセンセーショナルであり、ハイムをはじめとして、『人類の薄明』としてピントゥスが蒐集した一連の詩群には、その特徴が顕著である。むろんホディアスの詩もその例外ではない。

³ 『炬火』誌上に寄稿が載せられたのは、1911年までで、それ以降は、批判対象となる言説が引用され、組上にのぼせられるか、まれではあるが、クラウスの眼に合った作品が取り上げられることとなる。ホディアスの作品では、詩 *Lebendes Bild* が、『炬火』第317-318号40ページに掲載されている。ホディアスの詩作期間は短く、1912年頃の精神分裂症発症ゆえの入退院、1942年の強制収容所連行によって、作品の多くは散逸している。生前はほとんど無名の詩人であったが、クラウスは彼のきわめて初期の評価者といってよい。

⁴ ebd., S.79 f. 翻訳は、前傾書の他に、内藤道夫『詩的自我のドイツ的系譜』、同学社、1996年を参照した。

⁵ Klaus Vondung: *Die Apokalypse in Deutschland*. München 1988, S.360 ff.

⁶ ebd., S.11 f.

このような没落のヴィジョンは、表現主義者たちよりも十歳ほど年長のクラウスも共有する。けれども、彼らとクラウスとを画している線は、クラウスが没落の原因究明に思索を費やしたいわば批評精神である。その思索の結果は、クラウスが1898年に「新自由新聞」*Neue Freie Presse*の文芸欄の専属担当を断った時点からジャーナリズムに対してとっていた批判的態度と完全に一致するものであった。⁷1908年の批評『黙示録』のなかにある諷刺的なジャーナリズム批判は、それを端的に物語っている。

人類の随まで毒してきた報道機関から逃れて人類は森へ行きたがるが、森はもはや見つからない。かつて屹立していた木々が大地の恩恵を天まで持ち上げていたところに、日曜版が塔のようにそびえ立っている。大新聞がたった一つの課題のために大量の紙を必要とし、その生産のために二十メートルもある何万もの木々が倒されなければならなかったことに見当がつかなかったのだろうか。植林よりも急速に増刷がなされる。木々は日に二度葉をつけるにすぎないが、普段は一枚の葉もつけていない。⁸事態がここまでこのようなならただではすまぬ。「その煙の中から、いなごが地上に出てきたが、地のさそりが持っているような力が、彼らに与えられた。…その顔は人間の顔のようであり（黙示録9・7）…彼らは、地の草やすべての青草、またすべての木をそこなってはならないが、額に神の印がない人たちには害を加えてもよいと、言い渡された。」（黙示録9・3、4）しかし、彼らは人間たちに害を加え、木々をいたわることもなかった。（Nr.261-262, S.3 u. Bd.4, S.10 f. 括弧内は引用者、「黙示録」の該当章節番号を付記。）⁹

ジャーナリズムだけではなく、その受け手である読者をも（黙示録風に言い換えれば、獣と、それを崇拜する者たちをも）、批判の対象としている。「大量の紙」を浪費するこのジャーナリズム批判には、聖書の最初と最後、つまり『創世記』と『黙示録』に枠のように設えられた木々の描写（すなわち楽園の森のイメージと認識の

木、そして生命の木と）が、慣用表現を伴いながら、周到に織り込まれている。黙示録では、「ヘブル語でアバドン」「ギリシヤ語ではアポロン」（黙示録9・11）という権力を帯びた「破滅の王」は、ジャーナリズムに擬せられ、「害を加えてもよい」とされる「額に神の印がない人たち」は、ジャーナリズムに翻弄される大衆の譬えである。¹⁰そしてその際、黙示録のドイツ語訳 *Enthüllung*（暴露、覆いを剥ぐこと）を援用し、半ばイロニーシュに救いの希望を次のように語る。

私は長いこと密かにある観察方法にはまりこんでいた。それは、私がいかに語るかを、唯一無二の大事件と認めさせるものである。これが私が読者に対して果たさなければならない最後の暴露（die letzte Enthüllung）である。私は欺いた。そしてその都度深く狼狽した。そしてその都度、私にはそういうことはできないと思っていたことを知っていたのである。しかし私は、私が状況を暴露することになるアフォリズムを言う姿勢を変えなかった。このように、私は昔の名声に辛うじて寄生するしかないのである。これがいつまでも快適な意識であり続けると思える方がいらっしゃるであろうか。ところで、私は読者を助け、センセーションの欠損を補償する道を示してあげたかった。私は彼らが、ドイツ語という問題に対する理解を持つに至るまで教育したかった。すなわち、書かれたことばを、思想の自然必然的の体现であって、単なる意見の社会義務的な被いではないと理解する高みまで。私は彼らの脱ジャーナリズムを図りたかったのである。彼らも私の作品から何か得るようにと、彼らにそれを二回読むよう忠告した。彼らは憤慨し、地方銀行の情勢に反発する材料は載っていないかと次の号を調べたのである……。事態がこれほどまで進んでもうどれくらい経つのか知りたいものである。つまり、まだ暴露する価値のある唯一、公のひどい状況とは、公衆の愚かさだと私は言いたい。（Nr.261-262, S.11 f. u. Bd.4, S.18）

救いの希望は、クラウスにとってあくまでも、言語に則ったものでしかない。「思想の自然必然的の体现」であ

⁷ クラウスは1898年に、その後論敵となる文筆家マクシミリアン・ハルデンからの紹介により、「新自由新聞」の編集長モーリッツ・ベネディクトから、文芸欄担当の記者就任を要請されたが断っている。翌年の4月には彼のライフワークとなる個人誌『炬火』を発刊することになる。

⁸ 新聞の朝刊と夕刊とを意味し、Blatt という単語で、「葉」と「新聞」をかけたことば遊びとなっている。

⁹ Karl Kraus: *Die Fackel* (in 12 Bänden). Frankfurt a.M., Nachdruck von Karl Kraus: *Die Fackel* (in 39 Bänden). München 1968-76. 以下ここからの引用に際しては、引用末尾に号数とページ数のみを示す。また、クラウスの選集 Christian Wagenknecht (Hg.): *Karl Kraus Schriften in 20 Bänden*. にも採録されている場合、あわせて巻数とページ数のみ示す。翻訳は拙訳であるが、カール・クラウス『黒魔術による世界の没落』、山口裕之、河野英二訳、現代思潮社、2008年を参照した。

¹⁰ ここにみられるジャーナリズム批判は、戦争の総括として発表された詩『黙示録』におけるプロパガンダ批判に受け継がれる。引用されている黙示録第九章三、四節は、のちに言及する詩『黙示録』の18-23行に再引用されており、詩の54-65行に注目してみると、詩の十分の一を費やしているこの詩句は、『ヨハネの黙示録』では特にプロパガンダの獣と解釈されている部分を凝縮して引用しつつ、クラウスの思想の中心を占めるジャーナリズム批判とが二重写しになっている。戦争を鼓舞する言説を作り出してきたジャーナリズム批判として、黙示録のテキストが、クラウスの思想圏内で息づいてくる好例である。

る「書かれたことば」は、拠りどころのない「意見」であってはならず、ジャーナリズムが振りかざすお仕着せの「社会義務的な被い」であってはならない。これを理解するまで公衆を教化することができると、クラウスは自らのペンを信じていた。「公衆の愚かさ」を暴露するとは、クラウス特有の反語的表現である。つまり公衆は、ジャーナリズムを通じて愚かにされてきた。これこそクラウスが、脱ジャーナリズムを目指す所以である。蓋しクラウスはこの「読者への公開書簡」として『黙示録』をものしたのである。そして、ヨハネによる『黙示録』も、信者へ向けて破滅のあとの希望をも説いた「書かれたことば」であった。

ここで、ヨハネの黙示録とクラウスの黙示録をつなぐものを整理しておく。以下の四点である。1908年の批評「黙示録」は、「読者への公開書簡」と銘打たれているが、これは第一に、ヨハネの黙示録の形式上の引用である。第二に、クラウスの黙示録が当時の時代状況の批判であることも、ヨハネの黙示録が時代批判であったことを踏襲しているといえる。そしてこれは同時に没落の志向へと通じる。クラウスは、この没落の志向を、後により明確に、1912年の「黒魔術による世界の没落」のなかで、ジャーナリズムを黒魔術になぞらえて、戦前の終末的な気分、没落のヴィジョンをクラウスは引用をもって冷徹に浮かび上がらせた。その中でクラウスが批判するように、「新聞とは、戦争では、勇気を話の種にする[……]」(Nr.363-365, S.7 u. Bd.4, S.430) 類のものである。第三に、読者に対する教化、薫育である。ヨハネの黙示録が、キリスト教道德の反語的形式での伝授であるのに対し、クラウスのそれは、クラウス自身の道德観を支える「ことば」に関する理解の促進、ことばへの奉仕的態度への促しである。クラウスの思想においては正しいことばが使えるようになれば戦争は起こらないという極論が成立するのである。そして第四に、もちろん、語彙と文の引用である。これは詩に顕著である。そしてこの引用という手法はヨハネの黙示録が多用した手法でもあった。以上の四点がクラウスの黙示録とヨハネの黙示録に共通する点である。

詩『黙示録』—「引用」のダイナミズム—

クラウスは批評『黙示録』のなかで次のように語っている。「現実を求めず、また避けず、創造し、破壊していいいよって創造すること。こうすることでどれだけ脳を喜ばせることになるだろう。うねった脳の隅々から

日に二度、世界の糞尿を掃除することになるのだから。」(Nr.261-262, S.13 f. u. Bd.4, S.19) 日に二度の糞尿とは新聞の謂である。新聞が提供するお仕着せの現実把握は拒否され、その連関を切り崩すことによって新たに現実が創造される。ベンヤミンが、クラウスを読むことによって着想をえた「引用」というダイナミズムが、ここでクラウスの批評の技法と見事に一致する。

引用はことばを名で呼び出し、このことばをそれが置かれている連関から破壊しつつ切り出すのだが、しかしまさにそのことによって引用はその破壊されたことばをその根源に呼び戻してもいるのである。引用されたことばは韻を失うことなく、その音を響かせ、調和しながら、新しいテキストの構造の中に姿をあらわす。韻としてそのことばは自身のアウラにつつまれて、似たものを呼び集め、名としては孤独に、表現をもたぬまま佇んでいる。言語の前で二つの領域—根源と破壊—は、引用においてみずからの正当性を証明する。そして翻っていえば、この二つの領域の浸透しあっているところで—つまり引用において—のみ言語は完成しているのである。¹¹

ベンヤミンに倣っていえば、クラウスは、黙示録をその引用によって破壊し、黙示録を再構成する。かくしてベンヤミンがここで描く「引用」行為そのものが、黙示録的といえる。つまり、言語自らの「破壊」と、「根源」に立ち戻ること、すなわち再生である。¹²

第一次世界大戦に対して、クラウスは引用のモンタージュをもってあらがった。街角で拾ったことば、新聞の記事、公の発表等、また自らのテキストから、あらゆることばを一つの劇へと結集させた。すなわち、あらゆる角度からみた終末観、およびそこに付随するのいわば拾遺集としての戯曲『人類最期の日々』*Die letzten Tage der Menschheit* である。「このところ非常にしばしば話題になった我が国家の崩壊は、他の地域社会がこの社会のなかでの没落を望まないだろうから、個別的に完遂するであろうが、この崩壊はこのくだらぬおしゃべりに終止符を打つことになるであろう」と1908年の批評に先取りされているように、オーストリア帝国の内紛を含む「割譲戦争」*Verteilungskrieg* は、第一次世界大戦をもって終止符が打たれる。この「割譲戦争」ということばは、しばしば劇中で発される。帝国の没落の完遂を目の当たりにし、引用をのみ、その手法としたことばのルポルタージュで、当時の終末的雰囲気を描き出したのである。¹³

¹¹ WB. aa.O. S.363.

¹² 拙論「『ことばがわたしを支配する』—カール・クラウスの言語観—」(『思想』2012年、第6号、岩波書店) 251ページ以下「言語的『根源』へ」の節を参照。

¹³ フォンドゥングは、クラウスが『人類最期の日々』で引用の技法をとったことは、戦争の現実が、虚構で誇張しつづけることが用をなさず、また不可能なほどグロテスクであったことを理由として挙げている。KV. aa.O. S.425 f.

そしてクラウスは再び黙示録のテキストへかえってゆく。つまり黙示録のテキストのコラージュによって出来事は総括されるのである。この詩はほとんどが直接引用に近いかたちで成り立っている。テキストはほとんどが、ベネディクト会修道士であったレアンダー・ファン・エース (1772-1824) とそのいとこカール (1770-1847) による1807年の聖書訳に依拠している。クラウスは『剽窃について』 *Vom Pragiat* のなかで聖書からの引用について「私の短縮表現の詛りをほぼすでもっているエース訳から引いてきた」と語っている。(Nr.572-576,

S.61 u. Bd.7, S.146)¹⁴ ルター訳よりも簡潔なエース訳であるが、さらにそれよりもクラウスの引用の方が簡潔である。ことばのエッセンスを抽出し、凝縮したテキストになっている。¹⁵ 黙示録のテキストを引用した時事批評が、第一次世界大戦をけみして詩という形姿を帯びる。批評も詩も、直接引用によって『黙示録』のテキストを新しい文脈のなかでよみがえらせる。どんなに使い古されたことばでも、硬直したコンテキストから引用という破壊行為によって解放され、再び息吹きはじめるのである。

APOKALYPSE

Und wieder fiel ein Stern, der Wermuth hieß,
und brannte einer Fackel gleich die Erde
Und Wermuth ward der Ströme drittes Teil.
Wild um mich tobt die Zeit im Untergang,
sie töten sich, zum Ausgang zu gelangen: 5
der aber ist versperrt, so räumen sie
einander weg und immer weniger
verbleiben hier, einander Raum zu machen.
Doch jene andern, von den Strömen her,
die bitter nicht und ohne Trübnis sind, 10
befruchtend ihre Welt: die Menschen, die
nicht von den Wassern sterben, drängen zu
und werden immer mehr; ihr Antlitz ist
der Menschen Antlitz, doch sie haben Haare
wie Weiberhaare und die Zähne sind 15
wie die der Löwen und sie haben Schwänze
den Schlangen gleich und Köpfe haben sie,
zu schaden. Und wie Skorpionen haben
sie Macht, zu schaden. Doch es ward geboten,
nicht zu beleidigen das Gras auf Erden, 20
noch etwas Grünes, keinen Baum, jedoch
die Menschen, welche nicht das Siegel Gottes
an ihren Stirnen haben, die allein.
Die Zahl des Heerzugs ihrer Reiterei
war zweihundert Millionen und ich hörte 25
die Zahl. Und ihre Panzer feuerrot,
schwarzblau und schwefelfarbig und den Mäulern
brach Feuer, Rauch und Schwefel wild hervor,
und Rasseln wie von ungezählten Wagen
der Rosse, welche in das Schlachtfeld rasen, 30

黙示録

そして再びニガヨモギという名の星が落ち、
そして炬火さながらに地は燃え、
そしてニガヨモギが、第三の奔流となった。
私のまわりで荒々しく没落のさなかにある時は荒れ狂い
出口に達しようと、奔流は互いに流れを殺し合う。5
しかし出口は閉ざされていて、それらは
互いに余地をつくろうと斥け合い、
ここに留まるものはますます少なくなる。
けれども奔流からは別な、
苦く、濁りに濁った流れが、 10
その世界を受胎させつつある。すなわち人間、
洪水では死なぬ人間たちが押し寄せ
そして増え続ける。そのかんばせは
人間のそれで、しかしその髪は 15
女の髪のようにであり、そしてその歯は
獅子のそれのごとくして、蛇のような
尻尾があり、危害を与える頭がある。
そして蠍のように
危害を与える権力を持っている。しかし 20
地上の草にも、緑なすものにも、
いかなる樹木にも危害を与えてはならぬが、
人間たち、すなわち神の刻印を
額に持たない人間たちには害を加えよと言ひ渡された。
騎兵隊の数は 25
二億であった。私は聞いたのだ、
その数を。そしてその鎧は炎のように赤い色、
濃紺色、また硫黄色をしている。そして口から
炎、煙、そして硫黄を荒々しく吐き出した。
そして戦場へ疾駆する数知れぬ馬車からのごとく 30
鳴子が空を裂いた。 30

¹⁴ 翻訳に際しては、カール・クラウス『言葉』(『カール・クラウス著作集』第7、8巻)、武田昌一、佐藤康彦、木下康光訳、法政大学出版局、1993年を参照した。論述の都合上、一部改訳を試みたところもある。

¹⁵ クラウスの引用には、ルター訳と対照してみるとエース訳の方が重複箇所が多い。そこで詩本文とエース、ルター両聖書訳の該当箇所とを並べて資料として提示する。(本稿末尾資料1: Carl und Leander van Eß (Übs.): *Die heiligen Schriften des Neuen Testaments*. Braunschweig 1807 u. Martin Luther (Übs.): *Die Bibel oder die ganze Heilige Schrift des Alten und Neuen Testaments*. Berlin 1911. 併せて福岡大学が所蔵するエース訳聖書の表紙と黙示録のテキスト部分を提示する(資料2: Carl und Leander van Eß (Übs.): *Die heiligen Schriften des Neuen Testaments*. Sulzbach, im Naabkrais Bayerns 1810.)。また本研究チームの研究課題に鑑み、ドイツ語訳聖書刊行の年表も付しておく(資料3)。

zerriß die Luft. Schwarz wie ein Haarsack ward
 die Sonne und der ganze Mond wie Blut.
 Die Erde bebte, Sterne aber fielen
 wie Feigen ab, wenn sie ein Feigenbaum,
 vom großen Wind geschüttelt, wirft zur Erde. 35
 Und Hagel ward mit Feuer und Blut gemengt;
 und brennend stürzt ein großer Berg ins Meer.
 Ein fahles Pferd. Und der drauf saß, hieß: Tod;
 die Hölle folgte nach. Getötet ward
 das dritte Teil der Menschheit. Vormal's sprach sie: 40
 Wer ist dem Tier gleich? Und wer vermag
 mit ihm zu streiten? Denn dem Tiere war
 ein Maul gegeben, Lästerung zu reden
 und große Dinge, und ihm war die Macht
 gegeben, daß es zweiundvierzig Monat 45
 sein Wesen trieb und öffnete das Maul
 zu Lästerungen gegen Gottes Namen,
 so daß der ganze Erdkreis sich des Tiers
 verwunderte. Doch über alle Stämme
 und Sprachen und Nationen hat es Macht, 50
 von allen angebetet, deren Namen
 im Buch des Lammes nicht geschrieben steht,
 das vom Beginn der Welt dem Tod bestimmt ist.
 Und war ein andres Tier, das redete
 dem Drachen gleich und zwang damit die Menschen, 55
 daß sie das andere Tier anbeten mußten.
 Denn große Zeichen tat es und verführte
 mit diesen Wunderzeichen und belebte
 das Bild des andern Tiers und machte, daß sie
 getötet wurden, welche anzubeten 60
 des Tieres Bild sich weigerten, und daß sie
 ein Zeichen trugen und daß niemand konnte
 verkaufen oder kaufen, ohne daß er
 des Tieres Zeichen oder dessen Namen
 und dessen Zahl an seiner Stirne trug. 65
 Und hinter ihnen thront die große Hure
 und sitzt auf vielen Wassern, allberauschend,
 und mit ihr buhlten alle Könige
 und alle Untertanen wurden trunken
 vom Wein der Wollust. Und die Haut des Tiers, 70
 auf dem sie sitzt, ist ganz rosinfarben,
 sie selbst in Purpur angetan und Scharlach,
 und ist mit Perlen und Edelsteinen
 behangen und von Gold ganz übergoldet
 und einen goldnen Becher in der Hand 75
 hält sie, voll Greuel und übervoll von Unzucht.
 Und trunken von dem Blute aller Heiligen
 ist sie; und ihrer mich verwundernd
 sah ich sie. Doch sie fährt in die Verdammnis

太陽は毛織りの荒布のように黒くなり、
 月は全面血のようになり、
 大地は震え、天の星は
 いちじくが大風に揺られて
 振り落とされるように、地に落ちた。 35
 そして、電に炎と血が混じり、
 燃えながら大きな山が海へ落ちる。
 青白き馬。そしてそこに座すは、死。
 それに地獄が続いた。殺されたのは
 人類の三分の一。かつて人類は語っていた。 40
 誰がこの獣に等しかろう、そして誰が
 この獣と戦えようと。というのも獣には
 流神を、そして大言を吐く口があったからだ。
 そして獣には権力が与えられ、
 四十二ヶ月間その本性を発揮し、 45
 そして神の名に対して、
 口を開き、様々に冒瀆した。
 それゆえに全世界がこの獣を
 訝しく思ったのだ。けれどもあらゆる種族と
 言語と国家に権勢を持ち、 50
 名が世界の始まりから死ぬ定め
 子羊の書には書かれていない
 すべての人々から崇拜された。
 そしてもう一頭、獣がいた。それは竜さながらに語り、
 その語りで人間たちを強いて、 55
 第一の獣を崇拜させた。
 なぜならそれは偉大なしるしを行い、
 この奇跡のしるしで誘惑し、
 第一の獣の像に生命を与え、
 その像を崇拜するのを 60
 拒む者たちを殺させ、
 彼らにしるしをつけさせ、
 獣のしるし、或いは名と
 その数をその額につけずして、
 誰も売り買いさせなかったからである。 65
 そして獣たちの背後で大淫婦が君臨し、
 そして多量の水の上に座し、陶醉させつつ、
 彼女とあらゆる王が関係を持ち、
 あらゆる臣下は快樂の葡萄酒に酩酊した。
 そして彼女が座す獣の肌は 70
 全体が干しぶどうの赤い色をして
 彼女自身は紫と緋色に衣をまとい、
 真珠と宝石がぶら下がり、
 全体が金でメッキされ、
 そして彼女は金杯を手にし、 75
 残虐行為に満ち、猥褻行為に満ち溢れている。
 彼女はあらゆる聖者の血に酔っている。
 彼女を訝しく思いつつ
 私は彼女を眺める。しかし彼女は劫罰へと

mit jenem Tier. Und auch das andre Tier,	80	件の獣とともに赴く。そしてもう一頭の獣,	80
verführender Prophet der Lüge, wird		すなわち誘惑する虚偽の預言者も,	
bald nachgeworfen in den Feuersee.		すぐさま後から炎の池へ抛られる。	
Und jeglicher nach seinem Werk gerichtet!		そしてそれぞれの所業に応じて裁かれるのだ。	
Mein Herz schlägt an das Tor der Ewigkeit,		私の鼓動は永遠の門をたたく。	
daß ich Vollendung schaue und der Tod	85	私が完成を見るようにと。そして死が過ぎ去り,	85
vorbei sei und kein Leid, kein Schrei und Schmerz		苦しみもなく, 叫びも, 苦痛も	
vorhanden mehr und alle Augen schon		もはやなく, あらゆる目がすでに	
von Gott getrocknet und die Nacht vorbeil		神によって乾かされ, 夜は過ぎ去るようにと。	
Groß in der Sonne steht ein Engel da,		太陽のなかに大きくひとりの天使が立ち,	
mit großer Stimme ruft er zu den Vögeln,	90	大きな声で, 広大な空という空を翔る	90
die durch die Weiten aller Himmel fliegen:		鳥たちに呼びかける。	
„Kommt, sammelt euch zu Gottes großem Mahl!		「来たれ。神の偉大な正餐に集え。	
Fresset das Fleisch der Könige, der Feldherrn,		王たちの, 軍司令官たちの肉を食らえ。	
das Fleisch der Mächtigen, der Totschläger,		権力者たちの, 殺人者の肉を。	
und aller, die das Fleisch der Kreatur	95	生き物の肉を鴉の餌として	95
zum Fraß der Raben ausgeworfen haben,		抛った（臓物を抜いた）すべての者たちの肉を,	
und aller, welcher auf den Rossen sitzen,		馬上に座るすべての者の,	
der Greulichen, der Lügner, freßt ihr Fleisch!“		残虐な者たちの, 嘔吐きたちの肉を食らえ。」	
Und wieder strömt des Lebens lauter Strom,		すると再び生命の澄明な流れが流れ出し,	
und an den Ufern grünt des Lebens Holz.		そして岸辺には生命の木が緑なす。	
(Bd. 9, S. 370 ff.)			

この百行にも及ぶ詩のなかには第一次世界大戦による世界の没落の描写としての黙示録からの引用と、さきに触れたプロパガンダの獣とそれを崇拜する人間たちの描写がつけられ、戦争とジャーナリズムの因果関係が示唆されている。この詩は一見すると、モデルネにおける黙示録の特色である「端折られた黙示録」の表現に近く、終末的気分に満ちている。黙示録に特有の未来のヴィジョンはほぼ描かれていないかのようである。けれどもここでは、黙示録を同時代に呼び出すにあたってクラウドが施している仕掛けに注目し、黙示録の構造をクラウドが同時代に呼び出すさまを追ってゆきたい。

4-17行目に見られるように、黙示録の洪水のなかに、第九章七、十節を基にして、現代の人間を登場させる。また、批評『黙示録』で引用した第九章三、四節は、詩の18-23行に再引用されている。詩の十分の一を費やしている54-65行に注目してみると、この詩句は、『ヨハネの黙示録』では特にプロパガンダの獣と解釈されている部分を凝縮して引用しつつ、クラウドの思想の中心を占めるジャーナリズム批判とが折り重なる。このように、引用のコラージュによって黙示録のテキストを一度破壊し、クラウド自身が紡ぎ出す新たなコンテキストにおいて再生する。黙示録で人間をあらわすとされる象徴的な数字である6が並ぶ66行目からは「バビロンの大淫婦」が、引用のコラージュで描かれる。ここでは、それまでの過去形での描写ではなく、現在形に変わる。ヨハネは『黙示録』のなかで幻視を見る「私」として登場するが、引

用のコラージュで仕立てられたこの詩では、クラウドが観察者の「私」として「今」を見届けているかのようである。そこから一転して、79-98行目にかけて現在形、未来形、要求話法を使った表現による、没落に罪のある者達に対する劫罰の預言が下され、最後の二行の「すると再び生命の澄明な流れが流れ出し、／そして岸辺には生命の木が緑なす。」というわずかな望みが続く。黙示録のテキストを、時制を駆使して、同時代の批評として再生する。ヨハネの『黙示録』は22章から成り、第十九章で「千年王国」、第二十章で「千年王国後」、第二十一章で「新しいエルサレム」、そして最後の第二十二章に「イエスの再臨」が描かれる。『ヨハネの黙示録』でも全体の二割に満たない未来のヴィジョンを、クラウドは、詩の最後のわずか二行に「生命の木」として集約され託された希望の隠喩として表現する。ここには、没落の気分が支配する同時代にあって、その没落にただ殉じることを望まないクラウドの姿が垣間みえる。「園の中央にある木」、いわゆる認識の木から実を食べて以来、人間は、神によって遠ざけられた緑なす「生命の木」にはいまだたどり着いていない。そこへは、クラウドの批評の根本精神としての言語信仰を通じてのあらゆる現象に対する懐疑をおいてほか、辿り着きえないであろう。隠喩としての「生命の木」はことばへの絶対的服従を通じたあらゆる現象への懐疑、つまりは認識を通じてしかえられぬものなのである。百行に及ぶ詩の最後の二行の表現は、「端折られ」ずに残った希望である。

クラウスが好んで引用したキルケゴールの言葉にこうある。「ひとりひとりの人間は時代を助けることも、救済することもできない。できるのはただ、その没落を表現することだけである。」(Nr.777, S.16) 世界の没落を表現しうることばが、ジャーナリズムによって生み出されるべくもなく、ましてや世界が救済されるべくもない。表現主義者のそれは、時代の雰囲気余すところなく表現してはいた。けれどもそれは破壊と没落のヴィジョンで筆は留めおかれていた。しかしクラウスの手法は、『黙示録』のテキストを借りた引用という破壊と再生であり、ことばが「完成」する真の表現(Expression)であった。引用こそ、現実を照射しうるものだったがゆえに、クラウスは現実描写の表現として、世に横溢する言説を縦横に自らのテキストに織り込んでいったのである。

剽窃と引用—補説—

役人たちの空威張り、つまらぬ奴らを相手に
立派な人がじっと耐え忍ばねばならぬ屈辱
『ハムレット』第三幕第一場

カール・クラウスが、その批評と詩『黙示録』をものすにあたって引用したのが、ファン・エース訳の聖書であったことは触れた。エース訳を選んだ理由は、言語的特徴としての「短縮表現の詛り」だけにとどまらない。クラウスはユダヤの出自であるが、1911年4月8日に親友であった建築家アドルフ・ロースを身元保証人(Taufpate)として、ウィーンのカール教会にて洗礼を受け、カトリックに改宗している。ファン・エースはベネディクト会の修道士であり、神学者であったカトリック教徒である。19世紀までのドイツ語圏での聖書翻訳を概観してみると、ヴルガタを印刷したヨハネス・グーテンベルク(ca.1398-1468)の42行聖書(1455)以来、ヴルガタを底本とした翻訳が、16世紀前半までに十種以上出版されている。¹⁶ ルターは、この一連の聖書翻訳に対するアンチポーデとして、庇護先のヴァルトブルク城にて約11週間で新約聖書を翻訳する(いわゆる *Septembertestament* 1522)。エラスムスのギリシア語を底本とするこの翻訳がのちの教会だけでなく、ドイツ語にも影響を与えたことは周知のことであるが、ドイツ語圏ではこのルター訳聖書が、飛躍的に普及してゆくこととなる。ファン・エースは、ルター訳聖書とともに拡大する

プロテスタント勢力に抗するかたちで、カトリック勢力の庇護のもと、ヴルガタと、エラスムスのギリシア語訳聖書を底本として、19世紀初頭に聖書を翻訳している。待望久しいいわばカトリック教会のお墨付きの聖書といえたわけである。憶測の域は出ないにせよ、カトリックに改宗したクラウスの手元に、ファン・エース訳の聖書があったことは、あながち偶然ではない。

クラウスが聖書引用にあたってファン・エース訳を底本としたことに言及したのは自作『剽窃について』のなかであったが、そもそもなにゆえ「剽窃」なのか。この『剽窃について』の成立について亘る。『炬火』発刊当初から独自の言語批判を展開していたクラウスは、1920年頃に言語論をまとめた著作集刊行を計画する。1921年刊の『炬火』第572-576号が副題として「言葉の実習のために」*Zur Sprachlehre* と冠されていることから、言語論集の発刊は、彼の悲願だったことが伺えるが、¹⁷ 本号に『剽窃について』は採録されている。これに先立って1920年刊の『炬火』第552/553号の『同行者たち』*Die Gefährten* にて、「剽窃」に言及する要因を述べている。詩『黙示録』は、1920年刊の『炬火』第546-550号に掲載されたが、その後ほどなく、表現主義の詩人アルベルト・エーレンシュタイン Albert Ehrenstein (1886-1950) によって、ルター訳聖書を根拠に、クラウスの詩『黙示録』がどれほど「剽窃」されているかを逐一報告した記事が書かれた。これに対する反論が『同行者たち』であった。エーレンシュタインはホデイスと同じく、クラウスの『炬火』に詩が掲載された人物であったが、この一件を機に袂を分かť。『同行者たち』では、ルター訳と詩『黙示録』と重複する語彙を抜き出して「剽窃」だとクラウスを非難したエーレンシュタインを、出典の違いを根拠に、逆に槍玉に挙げていた。

『同行者たち』が、エーレンシュタイン個人への非難の記事であるのにたいして、『剽窃について』は、批判対象の個人名は出さず、引用と剽窃のあいだにある差異を普遍化しつつ、言語論にまで敷衍している論説である。ここに、クラウスの批評の手腕が明瞭に伺える。批評のなかで、エーレンシュタインは、「[わたくしクラウスを]『聖クラウシクス』と呼び、たいした深い意味もない冗談や諷刺や皮肉を意のままに用い、思想的基盤を書いた文字づらの機知にかけても相応の濫費をなさる利口者」、「正真正銘の気まぐれ文士」、「わが暴露家」(Nr.572-576, S.61 u. Bd.7, S.146) などと、形容されて登場する。¹⁸ クラウスは「剽窃」への反論のために、自ら

¹⁶ 資料3参照。

¹⁷ クラウスは、それまですでに『モラルと犯罪』*Sittlichkeit und Kriminalität* をはじめ三冊を『炬火』から編まれた著作集として世に問い、そして20年頃には四冊目の『黒魔術による世界の没落』*Untergang der Welt durch schwarze Magie* の出版準備に入っていた。彼の死後刊行された論集『言葉』には、本号の記事すべてが採録されている。

¹⁸ 翻訳の『言葉』の注記では、この「文士」は、「*Die Fackel* (『炬火』) のパロディー版 *Die Pinsel* (『筆』あるいは『男根』) を発行した Erwin Rosenberger のことか?」と推測されているが、「剽窃」をめぐる『炬火』の一連の記事を辿るとエーレンシュタインであることが確実視される。

の著作のなかで「剽窃」と批判されなかったふたつの事例を挙げる。ひとつはシェークスピアの『ハムレット』からの引用を施した詩作品『二十年をけみして』（Nr.508-513, S.1 ff. u. Bd.5, S.287 ff.）¹⁹ *Nach zwanzig Jahren* と、『黙示録』と同じくファン・エース訳のヨシュア記第六章五、十六、二十節を元とした『ギベオンの太陽に祈る』 *Gebet an die Sonne von Gibeon* (Nr.423-425, S.58 ff. u. Bd.5, S.125 ff.) である。後者に関してはクラウド自身がルター訳とエース訳の該当箇所を紙面に配し、同詩の該当箇所を自己引用して「剽窃の証明を容易に」できるよう提供している。²⁰

本説のモットーに挙げたハムレットが数え立てる苦難と悲嘆のリストから選び抜かれた二行の引用は、「この二行の言語的価値ではなく、ただひとつ、わたしの場合にもどのテーマも苦難の種子であり、なお欠けている二つのテーマつまり強圧的な国家権力と私を黙殺する世間が、もしもハムレットからの引用がなかったならば、空隙として残ってしまっただろうという」ものであり、「他のどんなシェークスピアの作品においても、この引用された詩句ほど強力かつ清新なものを見つけることは困難だろうということはまったく確実なので、その空隙にはあの二行の引用句がもぐり込まざるをえなかった」（Nr.572-576, S.61 f. u. Bd.7, S.146 f.）という。この二行の前には、クラウドによる批判対象のリスト「性と嘘、愚かさ、腐敗のもろもろ、／口調と常套句(フレーズ)、インキ、技術、死、／戦争と社会、暴利、政治、」という三行が配され、ハムレットの二行を挟んだあとには、「芸術と自然、愛と夢—／さまざまな動機は、どこから生まれるにせよ、／創造の御業にその栄光を甦らせること！」という希望が続けられる。

ところで、ここに引用した詩句を知っている人—わが暴露家もその一人に数え入れてもよい—はきっと沢山いるだろうが、わたしの思想がまさしくこのような前提から生命を得、したがってその思想は剽窃であるという点に価値があるということを理解する人—そしてわたしはあの暴露家をこのうちには数えない—はそれに比して数少ない。（Nr.572-576, S.61 u. Bd.7, S.146）

巷間において「横領」と指摘され非難される「クラウドによる『剽窃』」はクラウドによって「引用」、「借用」、「挿入の芸術的価値」、「生産的行為」とパラフレーズされ、「横領」と同義の「剽窃」と区別される。「剽窃」の包含する意味内容のあわいを截然と切り分けてみせるのがクラウドの比喩であり、隠喩である。

この借用は、言語の構成要素、つまり既存の言葉にたいして行われるのと同様に、これまた素材と化した既存の芸術作品の構成要素にたいしても行われうるのである。ところで、この既存の構成要素を、それをただ利用しただけですでに借用行為の生命と正当性を証明するような思想的文脈のなかへ掬い取るものであれ、あるいは、あらゆる模作がそうであるように、その構成要素から新しい価値を奪い取ってくるものであれ、いずれにしても、言葉にたいする敬意をたんに言葉への距離に負っているにすぎず、また、素材の知識はあっても何が問題なのかを知らず、先人のものを掬い取ることはもっぱらその行為の価値と原点の一般周知度とによって許されるのだということを知らないような者には、この借用行為はいかなる場合もいかがわしいものに思われるのだろう。（Nr.572-576, S.62 u. Bd.7, S.147）

この認容構造において語られる「思想」なき「剽窃」こそ、「クラウドの『剽窃』」とは区別されるべきものであり、ここに掲げた二つのクラウドからの引用に描かれる「人、者」たちの形容の反語的表現から読み取られる引用のダイナミズムを別言するならば、引用によって生命をうる思想は、言葉へ接近しようという敬意と深い知識とをもってなされる必然的な引用によって自然必然的に生み出されるともいいえよう。

¹⁹ 『二十年をけみして』 安川晴基訳（『思想』2012年、第6号、岩波書店）、356ページ以下。

²⁰ 資料4参照。福岡大学所蔵の *Die Fackel* のオリジナルから『剽窃について』 *Vom Plagiat* が掲載された号の表紙と記事の画像を転載した。表紙には大文字書きで「転載不許可」NACHDRUCK VERBOTEN とみえる。

[資料 1] クラウスのテキストとエース訳とルター訳黙示録の該当箇所

(左数字は行番号、中央数字は黙示録の章番号)

APOKALYPSE

Carl und Lesander van Eit

Martin Luther

Offenbarung Johannes. Die Offenbarung des Johannes.

- Und wieder fiel ein Stern, der Wermuth hieß,
und brannte einer Fackel gleich die Erde
Und Wermuth ward der Ströme drittes Teil.
Wild um mich tobt die Zeit im Untergang,
5 sie töten sich, zum Ausgang zu gelangen:
der aber ist versperrt, so räumen sie
einander weg und immer weniger
verbleiben hier, einander Raum zu machen.
Doch jene andern, von den Strömen her,
10 die bitter nicht und ohne Trübnis sind,
befruchtend ihre Welt: die Menschen, die
nicht von den Wassern sterben, drängen zu
und werden immer mehr; ihr Antlitz ist
der Menschen Antlitz, doch sie haben Haare
15 wie Weiberhaare und die Zähne sind
wie die der Löwen und sie haben Schwänze
den Schlangen gleich und Köpfe haben sie,
zu schaden. Und wie Skorpionen haben
sie Macht, zu schaden. Doch es ward geboten,
20 nicht zu beleidigen das Gras auf Erden,
noch etwas Grünes, keinen Baum, jedoch
die Menschen, welche nicht das Siegel Gottes
an ihren Stirnen haben, die allein.
Die Zahl des Heerzugs ihrer Reiterei
25 war zweihundert Millionen und ich hörte
die Zahl. Und ihre Panzer feuerrot,
schwarzblau und schwefelfarbig und den Mäulern
brach Feuer, Rauch und Schwefel wild hervor,
und Rasseln wie von ungezählten Wagen
30 der Rosse, welche in das Schlachtfeld rasen,
zerriß die Luft. Schwarz wie ein Haarsack ward
Die Sonne und der ganze Mond wie Blut.
Die Erde bebte, Sterne aber fielen
wie Feigen ab, wenn sie ein Feigenbaum,
35 vom großen Wind geschüttelt, wirft zur Erde.
Und Hagel ward mit Feuer und Blut gemengt;
und brennend stürzt ein großer Berg ins Meer.
Ein fahles Pferd. Und der drauf saß, hieß: Tod;
die Hölle folgte nach. Getötet ward
40 das dritte Teil der Menschheit. Vormalis sprach sie:
Wer ist dem Tier gleich? Und wer vermag
mit ihm zu streiten? Denn dem Tiere war
ein Maul gegeben, Lästerei zu reden
und große Dinge, und ihm war die Macht
45 gegeben, daß es zweiundvierzig Monat
sein Wesen trieb und öffnete das Maul
zu Lästereien gegen Gottes Namen,
so daß der ganze Erdkreis sich des Tiers
verwunderte. Doch über alle Stämme

8 10) Der dritte Engel blies; und es fiel vom Himmel ein großer Stern, brennend wie eine Fackel; er fiel auf den dritten Theil der Flüsse und Wasserquellen. 11) Der Stern hieß: Wermuth; und Wermuth ward der dritte Theil der Wasser und viele Menschen starben von diesem so bitter, gewordenen Wasser.

9 7) Die Heuschrecken sahen aus, wie Pferde zum Streit gerüstet; auf ihren Köpfen hatten sie wie Krönen von Gold, Menschen ähnlich waren ihre Weisheiten. 8) Sie hatten Haare, wie Weiberhaare, Zähne, wie Löwenzähne.

19) Der Rasse Macht ist in dem Raute und in den Schwänzen; denn ihre Schwänze gleichen Schlangen und haben Köpfe, und mit diesen schaden sie.

3) Aus dem Raute kamen Heuschrecken über die Erde, welchen Macht gegeben wurde, wie die Landkriechen sie haben. 4) Geboten wurde ihnen, weder das Gras der Erde, noch etwas Grünes, noch irgend einen Baum zu beschädigen, sondern bloß die Menschen, welche das Siegel Gottes nicht an ihren Stirnen haben.

16) Die Zahl des Heerzugs der Reiterei war: zweimal hundert Millionen. Ich hörte ihre Zahl. 17) Und so sah ich in der Erscheinung die Pferde und ihre Reiter: Diese hatten feurige, himmelblaue und schwefelfarbige Panzer; die Köpfe der Pferde aber glühten wie Eisen und aus ihren Mäulern ging Feuer, Rauch und Schwefel.

9) Panzer wie von Eisen, und ihre Flügel tauschten wie das Rasseln der Wagen, wenn der Pferde viele zum Schlachtfeld sausen.

12) Nun sah ich, daß es das sechste Siegel brach, und siehe! Es entstand ein großes Erdbeben. Schwarz wie ein Haarsack wurde die Sonne und der ganze Mond wie Blut.

13) Die Sterne des Himmels fielen zur Erde, wie der vom Sturm geschüttelte Feigenbaum seine nicht reifen Feigen abwirft.

7) Der erste (Engel) blies; und Hagel und Feuer, mit Blut gemischt, fiel auf die Erde, und der dritte Theil des Landes, der dritte Theil der Bäume, und alles grüne Gras verbrannte.

8) Der zweite Engel stieß in die Posaune, und es war, als stürzte ein großer Berg brennend in das Meer, und der dritte Theil des Meeres wurde Blut;

8) Ich sah hin und siehe! Ein fahles Pferd; seines Reiters Name war: Tod; in seinem Gefolge war das Todtenreich, und ihm ward die Macht gegeben, den vierten Theil der Erde zu verwüsten durch Schwert, Hunger, Pest und wilde Thiere.

18) Durch diese drei Weiberber, nämlich durch Feuer, Rauch und Schwefel, das aus ihren Mäulern ging, wurde der dritte Theil der Menschen getödtet.

4) Man betete den Drachen an, der die Gewalt dem Thiere gegeben hatte, und das Tier selbst betete man an. Der ist, so hieß es, dem Thiere gleich, und wer vermag mit ihm zu streiten?

5) Ein Maul ward ihm gegeben, das hoch daher redete und lästerte; und die Macht ward ihm verliehen, dieses zwei und vierzig Monate zu thun.

6) Und es öffnete sein Maul zu Lästereien gegen Gott, gegen seinen Namen, gegen seine Wohnung und gegen die Bewohner des Himmels.

10. Und der dritte Engel posaunete; und es fiel ein großer Stern vom Himmel, der brannte wie eine Fackel, und fiel auf das dritte Theil der Wasserströme und über die Wasserbrunnen.

11. Und der Name des Sterns heißt Wermuth; und das dritte Theil der Wasser ward Wermuth; und viele Menschen starben von den Wassern, daß sie waren so bitter worden.

7. Und die Heuschrecken sind gleich den Kassen, die zum Reize bereitet sind; und auf ihrem Haupt wie Krönen, dem Golde gleich, und ihr Antlitz gleich der Menschen Antlitz;

8. Und hatten Haare wie Weiberhaare, und ihre Zähne waren wie der Löwen:

19. Denn ihre Macht war in ihrem Munde; und ihre Schwänze waren den Schlangen gleich und hatten Häupter, und mit denselben taten sie Schaden.

3. Und aus dem Rauch kamen Heuschrecken auf die Erde; und ihnen ward Macht gegeben, wie die Skorpionen auf Erden Macht haben.

4. Und es ward ihnen gesagt, daß sie nicht beschädigten das Gras auf Erden noch kein Grünes noch keinen Baum, sondern allein die Menschen, die nicht haben das Siegel Gottes an ihren Stirnen;

16. Und die Zahl des reitenden Volkes war viel tausendmal tausend; und ich hörte ihre Zahl.

17. Und also sah ich die drauf saßen, daß sie hatten feurige und blaue Panzer, und die Häupter der Rosse waren wie die Häupter der Löwen; und aus ihrem Munde ging Feuer und Rauch und Schwefel.

9. Und hatten Panzer wie eisernen Panzer, und das Rasseln ihrer Hügel wie das Rasseln an den Wagen vieler Rosse, die in den Krieg saufen;

12. Und ich sah, daß es das sechste Siegel aufst, und siehe, da ward ein großes Erdbeben, und die Sonne ward schwarz wie ein hässlicher Sack; und der Mond ward wie Blut;

13. Und die Sterne des Himmels fielen auf die Erde, gleichwie ein Feigenbaum: seine Feigen abwirft, wenn er von großem Wind bewegt wird;

7. Und der erste Engel posaunete; und es ward ein Hagel und Feuer, mit Blut gemengt, und fiel auf die Erde; und das dritte Theil der Bäume verbrannte, und alles grüne Gras verbrannte.

8. Und der andre Engel posaunete; und es fuhr wie ein großer Berg mit Feuer brennend ins Meer; und das dritte Theil des Meeres ward Blut.

8. Und ich sah, und siehe, ein fahles Pferd; und der drauf saß, des Rasse hieß: Tod; und die Hölle folgte ihm nach. Und ihnen ward Macht gegeben, zu töten das vierte Theil auf der Erde mit dem Schwert und Hunger und mit dem Tod und durch die Tiere auf Erden.

18. Von diesen dreien ward erstet das dritte Theil der Menschen; von dem Feuer und Rauch und Schwefel, der aus ihrem Munde ging.

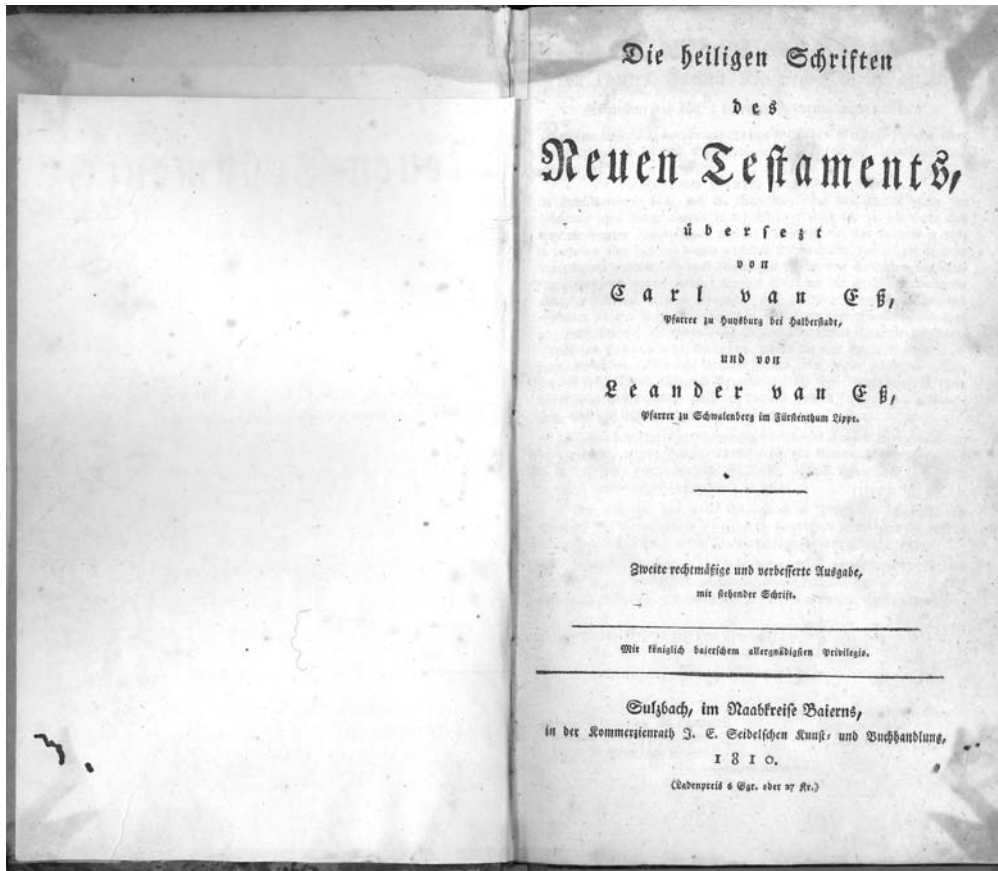
4. Und besetzten den Drachen an, der dem Tier die Macht gab, und besetzten das Tier an und sprachen: Wer ist dem Tier gleich? und wer kann mit ihm streiten?

5. Und es ward ihm gegeben ein Maul zu reden große Dinge und Lästereien, und ward ihm gegeben, daß es mit ihm wüthete zweiundvierzig Monaten lang.

6. Und es tat seinen Mund auf, zur Lästerei gegen Gott, zu lästern seinen Namen und seine Hütte und die im Himmel wohnen.

- 50 und Sprachen und Nationen hat es Macht,
von allen angebetet, deren Namen
im Buch des Lammes nicht geschrieben steht,
das vom Beginn der Welt dem Tod bestimmt ist.
Und war ein andres Tier, das redete
- 55 dem Drachen gleich und zwang damit die Menschen,
daß sie das andere Tier anbeten mußten.
Denn große Zeichen tat es und verführte
mit diesen Wunderzeichen und belebte
das Bild des andern Tiers und machte, daß sie
- 60 getötet wurden, welche anzubeten
des Tiers Bild sich weigerten, und daß sie
ein Zeichen trugen und daß niemand konnte
verkaufen oder kaufen, ohne daß er
des Tiers Zeichen oder dessen Namen
- 65 und dessen Zahl an seiner Stirne trug.
Und hinter ihnen thront die große Hure
und sitzt auf vielen Wassern, allberauschend,
und mit ihr buhlten alle Könige
und alle Untertanen wurden trunken
- 70 vom Wein der Wollust. Und die Haut des Tiers,
auf dem sie sitzt, ist ganz rosinfarben,
sie selbst in Purpur angetan und Scharlach,
und ist mit Perlen und Edelsteinen
behangen und von Gold ganz übergoldet
- 75 und einen goldnen Becher in der Hand
hält sie, voll Greuel und übervoll von Unzucht.
Und trunken von dem Blute aller Heiligen
ist sie; und ihrer mich verwundernd
sah ich sie. Doch die fährt in die Verdammnis
- 80 mit jenem Tier. Und auch das andre Tier,
verführender Prophet der Lüge, wird
bald nachgeworfen in den Feuersee.
Und jeglicher nach seinem Werk gerichtet!
Mein Herz schlägt an das Tor der Ewigkeit
- 85 daß ich Vollendung schaue und der Tod
vorbei sei und kein Leid, kein Schrei und Schmerz
vorhanden mehr und alle Augen schon
von Gott getrocknet und die Nacht vorbei!
Groß in der Sonne steht ein Engel da,
- 90 mit großer Stimme ruft er zu den Vögeln,
die durch die Weiten aller Himmel fliegen:
"Kommt, sammelt euch zu Gottes großem Mahl!
Fresset das Fleisch der Könige, der Feldhern,
das Fleisch der Mächtigen, der Totschläger,
- 95 und aller, die das Fleisch der Kreatur
zum Fraß der Raben ausgeworfen haben,
und aller, welcher auf den Rossen sitzen,
der Greulichen, der Lügner, freßt ihr Fleisch!"—
Und wieder strömt des Lebens lauter Strom,
- 100 und an den Ufern grünt des Lebens Holz.
- 13 7) Auch ward ihm zuge-
lassen, mit den Gottgeweihten zu krie-
gen und sie zu überwinden: "Ueber alle
Stämme, Völker, Sprachen und Na-
tionen ward ihm Macht gegeben. 8) Anbeten werden: es alle Erdbewohner,
deren Namen nicht vom Anfang der
Welt geschrieben sind im Lebensbuch des
Lammes, das geschlachtet ist.
- 11) Auch ein anderes Tier sah ich
von der Erde aufsteigen: es hatte zwei
Hörner wie ein Lamm, und sprach wie
ein Drache. 12) Auch übte es alle
Macht des ersten Tiers vor den Augen
aus; und brachte es dahin, daß die
Erde und ihre Bewohner das erste Tier,
dessen Todeswunde geheilt ward, anbeten.
13) Es that große Zeichen, so
daß es sogar vor den Augen der Men-
schen Feuer vom Himmel auf die Erde
fallen ließ. 14) Durch die Wunder-
zeichen, die es vor dem Tier zu thun
Macht bekam, verführte es die Erdbew-
ohner und überredete sie, ein Bild zu
machen dem Tiere, welches von dem
Schwert der Wunde hatte und neu auf-
lebte. 15) Ja Macht ward ihm gege-
ben, das Bild des Tieres zu befeelen,
daß es auch sprach und den Tod brachte
allen, welche dasselbe nicht anbeten.
16) Es brachte es dahin, daß alle, klein
und groß, reich und arm, Freie und
Skaven das Kennzeichen (a) des Tiers
auf ihrer rechten Hand und an ihrer
Stirne trugen: 17) Ja daß Niemand
kaufen und verkaufen kann, der das Kenn-
zeichen oder den Namen des Tiers,
oder die Zahl seines Namens nicht trägt.
- 1) Nun kam einer der sieben Engel,
welche die sieben Schalen hatten, redete
mit mir und sprach: Komm! ich will dir
zeigen das Strafgericht der großen Bada-
stria, die auf vielen Wassern thront;
2) mit ihr wählten die Könige der Erde,
und die Erdbewohner berauschten sich
mit ihrem Unzuchtsweine (b). 3) Und
er entsandte mich in eine Wüste, dorthin
sah ich das Weib auf einem scharlachro-
then Tiere sitzen, das voller Kälternä-
men war, und sieben Köpfe und zehn
Hörner hatte. 4) Das Weib war in
Purpur und Scharlach gekleidet, mit
Gold, Edelsteinen und Perlen geschmückt;
sie hielt in der Hand einen goldenen
Becher, der Schwel und der Unzucht
Schwelsigkeiten voll.
- 5) Und ich sah das Weib trun-
ken vom Blute der Heiligen und vom
Blute der Bräutigam Jesu; bei ihrem An-
blick überfiel mich großes Ersauern.
- 19) ward das Tier und mit ihm der Lügen-
prophet, der vor ihm die Zeichen that,
wobuch er die verführte, die des Tiers
Kennzeichen annahmen, und sein Bild
anbeteten. Lebendig wurden beide gewor-
fen in den Feuersee, der von Schwefel
brennt.
- 20) Das Meer gab seine Toten her; der
Tod und das Todtenreich gaben ihre
Toten. Jeder ward nach seinen Wer-
ken gerichtet.
- 21) Jede Thronen wird Gott
von ihren Augen trocken (a); der Tod
wird nicht mehr sein; aufhören werden
Trauer, Klage und Schmerz; denn das
Weiß ist vorüber (b).
- 19) In der Sonne sah ich ei-
nen Engel stehen, der allen durch des
Himmels Weite fliegenden Vögeln mit
starker Stimme rief: Kommt, sammelt
euch zu Gottes großem Mahl, 18) und
fresset Fleisch der Könige, Fleisch der
Oberbeschreiber, Fleisch der Mächtigen,
Fleisch der Pferde, Fleisch ihrer Reiter,
Fleisch von allen Freien und Skaven,
Knechten und Großen!
- 20) 1) Jetzt sah ich einen Engel vom Him-
mel herabsteigen, der den Schlüssel des
Abgrundes, und eine große Kette in sei-
ner Hand hatte. 2) Dieser griff den
Drachen, die alte Schlange, welche der
Teufel und Satan (a) ist, band ihn auf
ein Jahrtausend,
7. Und ihm ward gegeben zu strei-
ten mit den Heiligen und sie zu über-
winden; und ihm ward gegeben Macht
über alle Geschlechter und Sprachen
und Heiden. *Kap. 11, 7. Dan. 7, 21.
8. Und alle, die auf Erden wohnen,
besen es an, deren Namen nicht ge-
schrieben sind in dem Lebensbuch des
Lammes, das erwürgt ist. *von An-
fang der Welt.
11. Und ich sah ein ander Tier auf-
steigen aus der Erde; und hatte zwei
Hörner + gleichwie ein Lamm und
redete wie ein Drache.
*Kap. 13, 13. + Matth. 7, 13.
12. Und es übte alle Macht des
ersten Tiers vor ihm; und es machte,
daß die Erde und die drauf wohnen
anbeten das erste Tier, welches id-
liche Wunde heil worden war; *
*Kap. 13, 13. + Matth. 7, 13.
13. Und tat große Zeichen, daß es
auch machte Feuer vom Himmel fallen
vor den Menschen; *Matth. 24, 24.
14. Und verführte, die auf Erden
wohnen. *mit der Zeichen willen, die
ihm gegeben sind zu tun vor dem
Tier; und sagt denen, die auf Erden
wohnen, daß sie dem Tier ein Bild
machen sollen, das die Wunde vom
Schwert hatte und lebendig worden
war. *Matth. 13, 2-4.
15. Und es ward ihm gegeben, daß
es dem Bilde des Tiers den Geist gab,
daß das Tiers Bild redete und machte,
daß, welche nicht des Tiers Bild an-
beteten, erstötet würden.
16. Und es macht, daß die Kleinen
und Großen, die Reichen und Armen,
die Freien und Knechte, alleamt sich
ein Malzeichen geben an ihre rechte
Hand oder an ihre Stirn. *Kap. 13, 16.
17. Daß niemand kaufen oder ver-
kaufen kann, er habe denn das Mal-
zeichen, nämlich den Namen des Tiers
oder die Zahl seines Namens.
17. Und es kam einer von den
sieben Engeln, die die sieben
Schalen hatten, redete mit mir und
sprach zu mir: Komm, ich will dir
zeigen das Urteil der großen Hure,
die da an vielen Wassern sitzt;
*Kap. 13, 1.
2. Mit welcher gehuret haben die
Könige auf Erden, und die da wohn-
ten auf Erden, *trunken worden sind
von dem Wein ihrer Hurerei.
*Kap. 14, 8; 18, 3.
3. Und er brachte mich im Geist in
die Wüste. Und ich sah ein Weib sitzen
auf einem scharlachfarbenen Tier, das
war voll Namen der Kälternämen, und
hatte sieben Häupter und zehn Köpfe.
*Kap. 13, 12.
4. Und das Weib war bekleidet mit
Purpur und Scharlach, und übergülde-
t mit Gold und edlen Steinen und Per-
len, und hatte einen goldenen Becher
in der Hand, voll Greuels und Un-
sauerkeit ihrer Hurerei.
5. Und ich sah das Weib trunken vom
Blut der Heiligen und vom dem
Blut der Zeugen Jesu. Und ich ver-
wunderte mich sehr, da ich sie sah.
20. Und das Tier ward gegriffen und
mit ihm + der falsche Prophet, der die
Zeichen tat vor ihm, durch welche er
verführte, die das Malzeichen des
Tiers nahmen, und die das Bild des
Tiers anbeteten; lebendig wurden
diese beide in den feurigen Pfluhl
geworfen, der mit Schwefel brannte.
13. Und das Meer gab die Toten, die
darinnen waren; und der Tod und die
Hölle gaben die Toten, die darinnen
waren; und sie wurden gerichtet, ein
jeglicher nach seinen Werken.

[資料2] 福岡大学所蔵のエース訳聖書の表紙と黙示録のテキスト



[illegible]

a) Verläunder und Widersacher.

[illegible]

21. Kapitel.

Das neue Jerusalem.

[illegible]

a) Jer. 25, 8. b) Jer. 43, 18. c) Jer. 43, 19. d) Siehe Kap. 1, 8. e) Siehe Kap. 14, 22.

berufen an seiner Seite; die Straßen der Städte waren nicht voll, denn
22 durchdringliche Aralle gleich. Einen Tempel ließ ich nicht in ihr, denn
23 Gott, der Herr, der Allmächtige, ist selbst ihr Tempel und das Baum. Die
24 Erde erbaht nicht der Sonne, nicht des Mondes, das sie ihr scheinen; denn
25 die Erde schiedet sich nicht von mir, und die Städte sind nicht zerfallen
26 (gerechten) Völker werden in ihrem Thron wohnen, und die Säule der Erde
27 werden ihre Herrlichkeit und Macht in sie bringen. Ihre Thore werden
am Tage nicht verschlossen; (denn Nacht ist zu Nacht nicht). Der Völker
28 Thore und Thore werden nicht geschlossen, denn die Städte werden nicht
29 zerfallen, und was Errettung und Betrug wird, wird hineinkommen; nur die
30 Strafen, die ich nicht verheißt habe, werden nicht kommen. Und ich erlaube mir
31 den Thron des Lebens zu setzen, klar wie Krystal, vor dem Lichte Gottes und des
32 Lebens. Und ich werde die Thore der Städte nicht zerstören, und ich werde
33 Ströme, fließen der Baum des Lebens, der prosofial Früchte bringt, und ich
34 werde ihnen Wasser schenken. Das Baum der Frucht bringe den Völkern
35 zum Heilmittel. Da ich nicht verheißt habe, daß die Städte zerfallen, Gottes
36 und des Lebens Thron in die Städte nicht zerfallen, und ich werde die Städte
37 zum Angestrichen, und tragen ihren Namen an ihren Thürnen. Nacht wird
38 da nicht mehr sein; der Leuchte und des Sonnenlichts bedürfen sie nicht
39 mehr; denn Gott, der Herr, wird sie erleuchten, und herrschen werden sie in
40 alle Ewigkeit.

6. 1. sprach Er (a) * mir: Diese Worte sind zuverlässig und wahrhaftig,
7 und Gott, der Herr der prophetischen Völker, hat seinen Segen gesandt,
8 ihren Knechten anzuzeigen, was folgen sollenden. Und siehe! ich sende
9 dich; * Gerechtigkeit und Wahrheit werden ich senden, und die Wahrheit
10 wahr! Und ich, Johannes, bin es, der dies sah und hörte. Und als ich
11 es gehört und gesehen hatte, fiel ich nieder, um anzubeten, vor dem Thron des
12 Lebens, und mir, der es gesah. Er aber sprach zu mir: Du bist nicht; ich
13 bin hier und keine der Völker, die ich sende. Und ich werde die Städte nicht
14 zerfallen, und die Städte werden nicht zerfallen. Und ich werde die Städte
15 Worte dieses Buches nicht behalten. Gere Gott an! Auch sagte er zu
16 mir: Verstehe nicht die Worte der Beifügung in diesem Buch! Denn die
17 Zeit ist nahe. Was den dem Gerechten, ferne noch die Zeit ist, und die
18 Zeit ist nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit
19 ist nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist
20 nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist
21 nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist
22 nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist
23 nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist
24 nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist
25 nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist
26 nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist
27 nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist
28 nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist
29 nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist
30 nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist
31 nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist
32 nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist
33 nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist
34 nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist
35 nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist
36 nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist
37 nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist
38 nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist
39 nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist
40 nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist nahe, und die Zeit ist

a) Wohl derselbe, der Kap. 1, 11 anfieng; nach B. 7. Jesu.

Anweisung
der Episteln und Evangelien
an Sonn- und Festtagen.

1. Sonntag des Advents. Epistel: Römer 12, 17 bis 19 Ende. Evangelium: Lukas 21, 25 bis 28.	2. Sonntag des Advents. Epistel: Römer 12, 17 — 19. Evangelium: Matth. 12, 31 — 37.	3. Sonntag des Advents. Epistel: Lukas 21, 25 — 28. Evangelium: Joh. 1, 19 — 29.	4. Sonntag des Advents. Epistel: 1. Petrus 4, 1 — 6. Evangelium: Lukas 3, 1 — 7.	Erste Epistel: Titus 2, 11 bis 14 Ende. Evangelium: Lukas 2, 1 — 15. Zweite Epistel: Titus 2, 11 — 15. Zweites Evangelium: Lukas 3, 15 — 21. Dritte Epistel: Titus 2, 11 — 15. Drittes Evangelium: Joh. 1, 1 — 15.	Erstehung Christi. Epistel: Apostelgeschichte 13, 30 u. 31, und Rom. 7, 24 bis 14 Ende. Evangelium: Matth. 28, 1 bis 14 Ende. Sonntag nach Christus. Epistel: Galat. 1, 1 — 6. Evangelium: Lukas 24, 1 — 48.	Neujahr. Epistel: Galat. 3, 23 bis 14 Ende und Rom. 8, 29 bis 31. Evangelium: Lukas 2, 21 bis 24 Ende. Sonntag nach Neujahr. Epistel: Galat. 3, 23 — 29. Evangelium: Matth. 23, 37 — 39.	Die Reihe der Erscheinungen Christi. Epistel: Lukas 24, 1 — 48. Evangelium: Matth. 28, 1 — 10. 1. Sonntag nach der Erscheinung Christi. Epistel: Römer 12, 17 — 19. Evangelium: Lukas 24, 1 bis 14 Ende. 2. Sonntag nach der Erscheinung Christi. Epistel: Römer 12, 17 — 19. Evangelium: Matth. 28, 1 — 10. 3. Sonntag nach der Erscheinung Christi. Epistel: Römer 12, 17 bis 19 Ende. Evangelium: Matth. 28, 1 — 10. 4. Sonntag nach der Erscheinung Christi. Epistel: Römer 12, 8 — 11. Evangelium: Matth. 28, 1 — 10. 5. Sonntag nach der Erscheinung Christi. Epistel: Römer 12, 17 — 19. Evangelium: Matth. 28, 1 — 10. 6. Sonntag nach der Erscheinung Christi. Epistel: 1. Petrus 1, 2 — 10. Evangelium: Matth. 28, 1 — 10.	Sonntag Quinquagesime. Epistel: Römer 12, 17 bis 19 Ende. Evangelium: Lukas 21, 25 bis 14 Ende. Achtzigstendwoche. Epistel: Jerem. 31, 1 — 3. Evangelium: Lukas 19, 16 — 23. 1. Sonntag in der Fasten. Epistel: 1. Petrus 1, 1 — 12. Evangelium: Matth. 4, 1 — 12. 2. Sonntag in der Fasten. Epistel: 1. Petrus 1, 1 — 12. Evangelium: Matth. 4, 17 — 22. 3. Sonntag in der Fasten. Epistel: 1. Petrus 1, 1 — 12. Evangelium: Matth. 4, 23 bis 14 Ende. Evangelium: Joh. 6, 1 — 15. 4. Sonntag in der Fasten. Epistel: 1. Petrus 1, 1 — 12. Evangelium: Matth. 4, 23 bis 14 Ende. Evangelium: Joh. 6, 1 — 15. 5. Sonntag in der Fasten. Epistel: 1. Petrus 1, 1 — 12. Evangelium: Matth. 4, 23 bis 14 Ende. Evangelium: Joh. 6, 1 — 15. 6. Sonntag in der Fasten. Epistel: 1. Petrus 1, 1 — 12. Evangelium: Matth. 4, 23 bis 14 Ende. Evangelium: Joh. 6, 1 — 15. 7. Sonntag in der Fasten. Epistel: 1. Petrus 1, 1 — 12. Evangelium: Matth. 4, 23 bis 14 Ende. Evangelium: Joh. 6, 1 — 15. 8. Sonntag in der Fasten. Epistel: 1. Petrus 1, 1 — 12. Evangelium: Matth. 4, 23 bis 14 Ende. Evangelium: Joh. 6, 1 — 15. 9. Sonntag in der Fasten. Epistel: 1. Petrus 1, 1 — 12. Evangelium: Matth. 4, 23 bis 14 Ende. Evangelium: Joh. 6, 1 — 15. 10. Sonntag in der Fasten. Epistel: 1. Petrus 1, 1 — 12. Evangelium: Matth. 4, 23 bis 14 Ende. Evangelium: Joh. 6, 1 — 15. 11. Sonntag in der Fasten. Epistel: 1. Petrus 1, 1 — 12. Evangelium: Matth. 4, 23 bis 14 Ende. Evangelium: Joh. 6, 1 — 15. 12. Sonntag in der Fasten. Epistel: 1. Petrus 1, 1 — 12. Evangelium: Matth. 4, 23 bis 14 Ende. Evangelium: Joh. 6, 1 — 15.
---	---	--	--	---	---	---	--	---

[資料3] 聖書のドイツ語訳年表

聖書のドイツ語翻訳 (抄)

9.Jh. Die Mondseer Fragmente (Matthäusevangelium, Althochdeutsch, Altbairisch)

ca.830 Heliand

Otfrid von Weißenburg (ca.790-875)

ca.870 Liber evangeliorum (Südrheinfränkisch)

ca.1200 Wien-Münchener Evangelienfragmente

1452/54 Gutenberg-Bibel (Vulgata, Mainz)

Johannes Mentelin (ca.1410-1478)

1466 Mentelin-Bibel

1470 Eggstein-Bibel (Straßburg)

1475 Zainer-Bibel (Augsburg, 2. Aufl. 1477)

1475 Pflanzmann-Bibel (Augsburg)

1476-78 Sensenschmidt-Bibel (Nürnberg)

1477 Sorg-Bibel (Augsburg, 2. Aufl. 1480)

1478/79 Kölner-Bibeln

1483 Koberger-Bibel (Nürnberg)

1485 Grüninger-Bibel (Straßburg)

1487/90 Schönsperger-Bibeln (Augsburg)

1494 Lübecker Bibel

1507 Otmar-Bibel (Augsburg)

1518 Otmar-Bibel (Augsburg)

1522 Halberstädter Bibel

Martin Luther (1483-1546)

1522 Septembertestament

1534 Volltext

Zwingli, Ulrich (1484-1531)

1524-29 Zürcherbibel

Piscatol, Johannes (1546-1625)

1602-04 (Bible de Genève, Lutherbibel)

van Eß, Karl (1770-1824)

van Eß, Leander (1772-1847)

1807 Das Neue Testament (Vulgata)

van Eß, Leander (1772-1847)

1822/36 Das Alte Testament in zwei Teilen (Hebräisch)

von Mayer, Johann Friedrich (1772-1849)

1819 Mayer-Bibel (Lutherbibel)

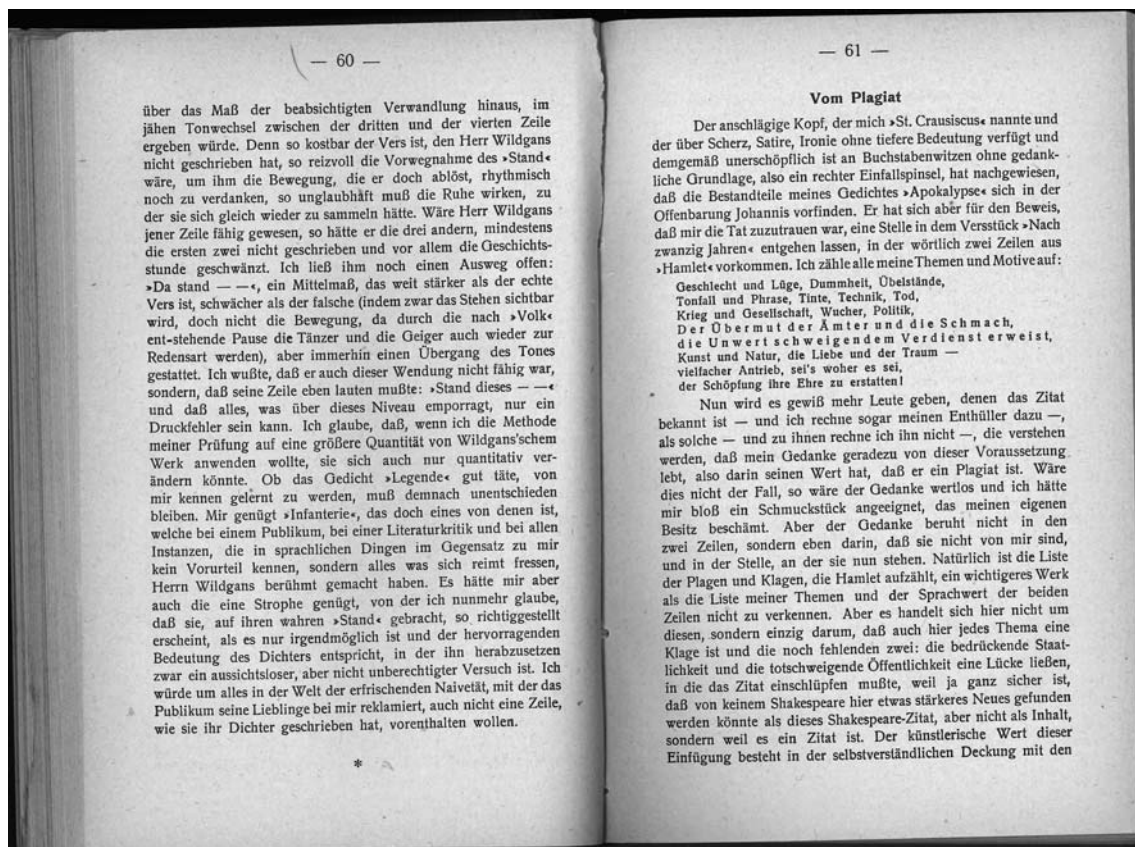
von Allioli, Joseph Franz (1793-1873)

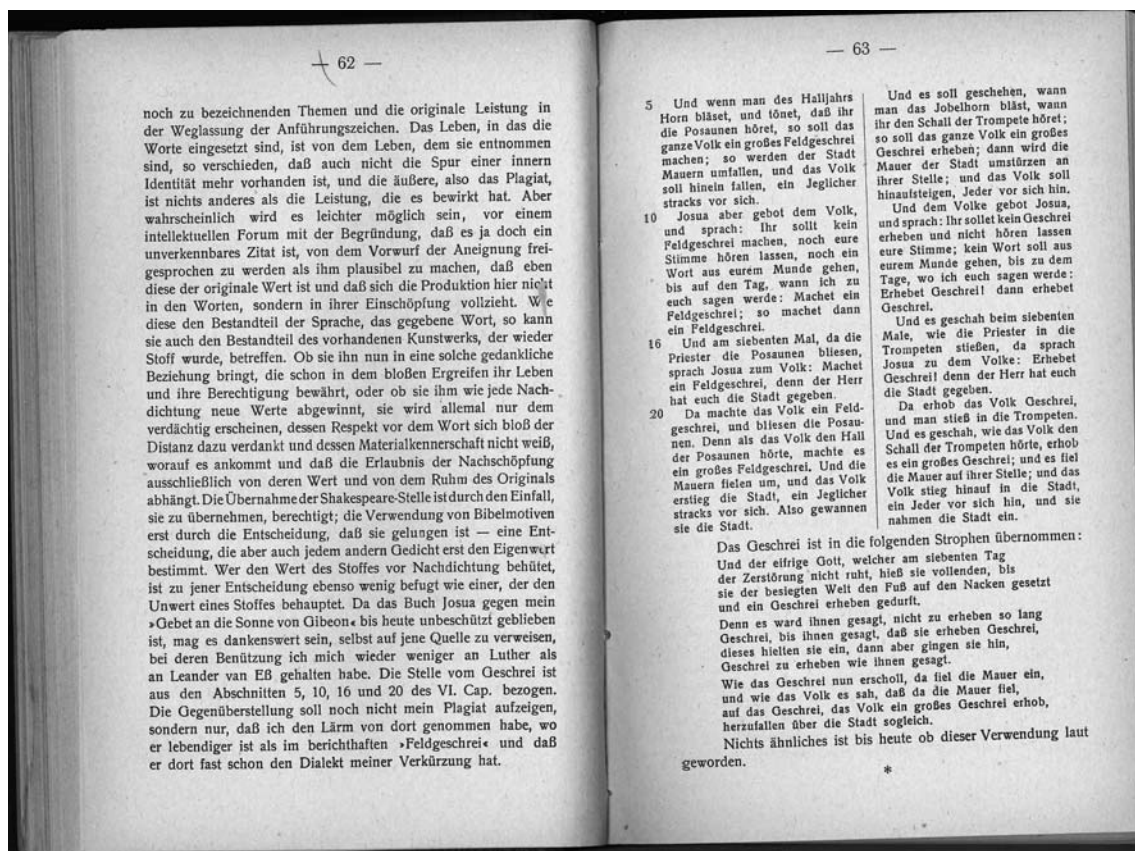
1830-34 Allioli-Bibel

1855/71 Elberfelder Bibel

参考 : G. Krause u. G. Müller (Hg.): *Theologische Realenzyklopädie*. Berlin 1993.

〔資料4〕福岡大学が所蔵する『炬火』オリジナルの第572-576号の表紙と『剽窃について』のテキスト部分





noch zu bezeichnenden Themen und die originale Leistung in der Weglassung der Anführungszeichen. Das Leben, in das die Worte eingesetzt sind, ist von dem Leben, dem sie entnommen sind, so verschieden, daß auch nicht die Spur einer innern Identität mehr vorhanden ist, und die äußere, also das Plagiat, ist nichts anderes als die Leistung, die es bewirkt hat. Aber wahrscheinlich wird es leichter möglich sein, vor einem intellektuellen Forum mit der Begründung, daß es ja doch ein unverkennbares Zitat ist, von dem Vorwurf der Aneignung freigesprochen zu werden als ihm plausibel zu machen, daß eben diese der originale Wert ist und daß sich die Produktion hier nicht in den Worten, sondern in ihrer Einschöpfung vollzieht. Wie diese den Bestandteil der Sprache, das gegebene Wort, so kann sie auch den Bestandteil des vorhandenen Kunstwerks, der wieder Stoff wurde, betreffen. Ob sie ihn nun in eine solche gedankliche Beziehung bringt, die schon in dem bloßen Ergreifen ihr Leben und ihre Berechtigung bewährt, oder ob sie ihm wie jede Nachdichtung neue Werte abgewinnt, sie wird allemal nur dem verdächtig erscheinen, dessen Respekt vor dem Wort sich bloß der Distanz dazu verdankt und dessen Materialkennerschaft nicht weiß, worauf es ankommt und daß die Erlaubnis der Nachschöpfung ausschließlich von deren Wert und von dem Ruhm des Originals abhängt. Die Übernahme der Shakespeare-Stelle ist durch den Einfall, sie zu übernehmen, berechtigt; die Verwendung von Bibelmotiven erst durch die Entscheidung, daß sie gelungen ist — eine Entscheidung, die aber auch jedem andern Gedicht erst den Eigenwert bestimmt. Wer den Wert des Stoffes vor Nachdichtung behütet, ist zu jener Entscheidung ebenso wenig befugt wie einer, der den Unwert eines Stoffes behauptet. Da das Buch Josua gegen mein »Gebot an die Sonne von Gibeon« bis heute unbeschützt geblieben ist, mag es dankenswert sein, selbst auf jene Quelle zu verweisen, bei deren Benützung ich mich wieder weniger an Luther als an Leander van Eß gehalten habe. Die Stelle vom Geschrei ist aus den Abschnitten 5, 10, 16 und 20 des VI. Cap. bezogen. Die Gegenüberstellung soll noch nicht mein Plagiat aufzeigen, sondern nur, daß ich den Lärm von dort genommen habe, wo er lebendiger ist als im berichthafte »Feldgeschrei« und daß er dort fast schon den Dialekt meiner Verkürzung hat.

- 5 Und wenn man des Halbjahrs Horn bläset, und tönst, daß ihr die Posaunen höret, so soll das ganze Volk ein großes Feldgeschrei machen; so werden der Stadt Mauern umfallen, und das Volk soll hinein fallen, ein Jeglicher stracks vor sich.
- 10 Josua aber gebot dem Volk, und sprach: Ihr sollt kein Feldgeschrei machen, noch eure Stimme hören lassen, noch ein Wort aus eurem Munde gehen, bis auf den Tag, wann ich zu euch sagen werde: Machtet ein Feldgeschrei; so machet dann ein Feldgeschrei.
- 16 Und am siebenten Mal, da die Priester die Posaunen bliesen, sprach Josua zum Volk: Machtet ein Feldgeschrei, denn der Herr hat euch die Stadt gegeben.
- 20 Da machte das Volk ein Feldgeschrei, und bliesen die Posaunen. Denn als das Volk den Hall der Posaunen hörte, machte es ein großes Feldgeschrei. Und die Mauern fielen um, und das Volk erstieg die Stadt, ein Jeglicher stracks vor sich. Also gewannen sie die Stadt.

Und es soll geschehen, wann man das Jubelhorn bläst, wann ihr den Schall der Trompete höret; so soll das ganze Volk ein großes Geschrei erheben; dann wird die Mauer der Stadt umstürzen an ihrer Stelle; und das Volk soll hinaufsteigen, Jeder vor sich hin. Und dem Volke gebot Josua, und sprach: Ihr sollt kein Geschrei erheben und nicht hören lassen eure Stimme; kein Wort soll aus eurem Munde gehen, bis zu dem Tage, wo ich euch sagen werde: Erhebet Geschrei! dann erhebet Geschrei.

Und es geschah beim siebenten Male, wie die Priester in die Trompeten stießen, da sprach Josua zu dem Volke: Erhebet Geschrei! denn der Herr hat euch die Stadt gegeben.

Da erhob das Volk Geschrei, und man stieß in die Trompeten. Und es geschah, wie das Volk den Schall der Trompeten hörte, erhob es ein großes Geschrei; und es fiel die Mauer auf ihrer Stelle; und das Volk stieg hinauf in die Stadt, ein Jeder vor sich hin, und sie nahmen die Stadt ein.

Das Geschrei ist in die folgenden Strophen übernommen: Und der eifrige Gott, welcher am siebenten Tag der Zerstörung nicht ruht, hieß sie vollenden, bis sie der besiegten Welt den Fuß auf den Nacken gesetzt und ein Geschrei erheben gedurft. Denn es ward ihnen gesagt, nicht zu erheben so lang Geschrei, bis ihnen gesagt, daß sie erheben Geschrei, dieses hielten sie ein, dann aber gingen sie hin, Geschrei zu erheben wie ihnen gesagt.

Wie das Geschrei nun erscholl, da fiel die Mauer ein, und wie das Volk es sah, daß die Mauer fiel, auf das Geschrei, das Volk ein großes Geschrei erhob, herzufallen über die Stadt sogleich.

Nichts ähnliches ist bis heute ob dieser Verwendung laut geworden.